

「ひぐま会」の若者たち

**開拓者精神を受け継ぐ
北海道の財産。**

大きい雪だるま!
ばくも遊びたいなあ!

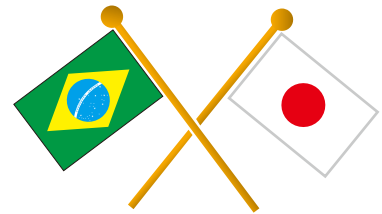


▲ひぐま会大集合 雪だるま祭

「ひぐま会」(藤田タカシ・エリオ会長)は、ブラジル・サンパウロ市に拠点を置くブラジル北海道協会の青年部。ヒグマの強いイメージから、その名前がつけられた。20代から40代までのブラジル生まれの日系人たちで構成され、イベントの実施や北海道との積極的な交流事業を通じて協会を盛り上げている。

昨年2月には、安平町から空輸された巨大雪だるまで、約8千人の集客に成功しブラジル全土でのテレビ中継を呼び込んだ。これは紛れもなく彼らの団結力の賜物といえる。

大志を抱き90年前にブラジルへ移住した北海道人の血を受け継ぐこの若者たちには、先祖の開拓者精神



がしっかり根付いている。先祖の故郷・北海道に郷愁を抱きながら、ブラジルで日本語や日本文化・精神、そして北海道の魅力や次世代に伝えていくことも彼らの役割だ。

ひぐま会は、140年の開拓の歴史から生まれた立派な北海道の財産である。

【青年部会員・山口貴史(北海道出身の日本人)】



▲ひぐま会役員

▲秋まつりのアイス売り

留学生日記

中国からやってきた閻玉華さんの体験



中華人民共和国

怖がらずに何にでも チャレンジしましょう

来日8年目になるという中華人民共和国からの留学生、閻玉華(えんぎょっか)さんは、話しの結びで、力強くそう言った。遼寧省大連近郊の農村の出身。現在札幌学院大学の大学院で会計学を勉強している。

中学生の時に日本語の勉強を始めた。玉華さんの通っていた中学校では日本語が第一外国語として教えられていた。その後も勉強を続けてきたが、なかなか話せるようにならないので、「日本に留学しよう」と決心しての来日であった。日本での生活がスタートした頃は言葉が聞き取れなく、アパートを借りるにも買い物をするにも大変だったという。買い物の仕方がわからないのでしばらくの間は故郷から持参した食品を食べ繋いだという涙ぐましい思い出もある。

次は“就活”です

それが今まで留学生生活を続けられたのは、「とにかく日本語が話したい」、「日本の社会や仕事のこともっと知りたい」一念でした。今来年3月に提出する修士論文を書いている。「論文を書き上げたら、次は“就活”です。日本で仕事がしたいです」

日本人との接点は多くはないが、今の宿舎では院生などが留学生の悩みを聞いてくれる機会もあってそれに助けられている。また、各国からの留学生同士でお国料理を披露し合うなど様々な国のことを知るのを楽しんでいる。



▲国際理解教室で講師を務める閻玉華さん

日本で暮らして成長したと自己分析

農村地帯で育ったので人と話すのが得意ではないおとなしい性格だったが、日本での暮らしで自分が成長したのを感じたという。「大自然の中、農業を手伝いながら育ったので我慢強くて、留学生としての困難な生活を乗り切ってきたと思います。日本という外国での生活を続けて来て忍耐強くなりました」。

北方圏センターが開催した国際理解教室などで講師として中学生と交流した時も、「学校での勉

強が辛いこともあるかもしれないけれど、それを乗り越えたら喜びが生まれます」と自分の経験を交えて話したという。彼女は落ち込んだ時、辛い時、寂しい時に音楽をよく聴く。「音楽から力をもらって心が慰められます。何かを考えさせてくれる歌が好きです」。

「日本語がまだ下手」と謙遜していたが、いえいえ、とても上手。そして自然な笑顔を絶やさず話しかけられるのが素敵なお女性である。良い仕事が見つかりますよ、きっと。

日本の社会や
仕事のことも
もっと
知りたい



国籍 / 中国
名前 / 閻玉華さん
(えんぎょっか)